生徒会の二次

墨風　澄春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
生徒会の二次

【Ｎコード】
Ｎ５４６６Ｉ

【作者名】
墨風　澄春

【あらすじ】
「かけがえのない物を、無から有を、生み出すのよ！」
――――相も変わらず、会長は何かの本の受け売りを偉そうに言っていた。
だが、今回の生徒会は何かが違う！
そう！　これは……二次創作なのだッ！

第読み切り話　「二次創作する生徒会」

「かけがえのない物を、無から有を、生み出すのよ！」

会長が何かの本の受け売りを偉そうに言っていた。……と言うかだ。

「この作品でそれ言いますか。会長」

「むむっ。何のことかな！　分からないなあ！」

会長は「むっふふー」と得意げな笑顔を浮かべる。どうしようかなあ。言っていいのだろうか。これが二次創作の小説であること。他の小説を見る限り、こういうのはなり切って演じて、「これは二次創作」というのは言わないでおく、いわゆる暗黙の了解事項的な思想で進めるべきなのだろうけど。

会長もそれを分かっているらしく、意味不明に白を切っている。どうやら、俺に事実が言えないことを、さも自分の勝利のように受け取っているらしい。

「分からないなあー、杉崎いー。ふっふっふー」

会長はそのロリ顔でできるだけの意地悪なＳ顔を作り出している。……なんだろう。やっぱ大人でも、子供に馬鹿にされると腹立つよ

ね。今の俺、そんな感覚に襲われています。

わなわなと会長に見えないとこで震える俺の拳を見据えて、知弦さんが勉強用のノートをぱたんと閉じて、「まあ」と話を切り出す。

「アカちゃんのその思想、私は嫌いじゃないわよ」

その言葉に、ペン回しの練習をしていた深夏が「あれ？」と手を止める。

「ちょっと意外だよな。知弦さんて、「無から有」って言うより「有を無に」みたいな感じなのに」

隣にいた真冬ちゃんも、「ま、真冬も同感です」と頷いている。俺も同感だ。

二人のある意味失礼な反応に、知弦さんは不満の表情一つもなし。

「ええ。どちらかと言えばそっちの方が好きね」

「ならなぜ……？」

俺が反射的に聞くと、知弦さんは不敵な笑顔を作って、

「だって、何かが作られていかないと、壊すこともできないじゃない」

「……っ！　つ、ツッコみたいのに、なぜかツッコめないだと！」
「ま、全くだ……！　酷いこと言っちゃあいるが、それをなぜか否定できねえ！」
俺と深夏が手の施しようもない事態に硬直する。後ろで真冬ちゃんが「う、宇宙の真理です……！」とか驚愕している。
「日本一の美しさを誇った安土城……。あれも、私の破壊に値する創造だったわ」
「ここで歴史を揺るがす一言が！」
「最大魔法『超創造爆発・宇宙創造（ビッグ・ヴァン）』を発動したのも、私だし」
「宇宙の創造者だった！　知弦さん、一体何歳ですか！？」
「言語じゃ表せないわね」
「人類の域を超えていた！」
何てこった。知弦さんは……宇宙一の年増だった！
「大丈夫よ。体は、まだ女子高生レベルだから」
「どれだけ体の発達遅れてんですか！」
「一兆年に一歳の割合で年を取っているわ」

「もはや不老不死！」

二次創作限定で明かされた事実に俺が絶望していると、蚊帳の外に放り出された会長が、「むむむー！」とお怒りの声を上げていた。

「私の話はこれからなのにぃ！」

「あ、すいません。会長の話より知弦さんの年齢の方が気になってしまって」

「私とタメに決まってるじゃない！」

実際その通りなのだが、俺と椎名姉妹は会長と知弦さんを見比べてみてこう思った。

（この二人が同級生なんて、し、信じられねえ……！）

まあ、それはこの生徒会ができた時に驚いたわけだから、今さらこうして驚愕することもないわけだけど。

「んで、知弦さんの年齢より優先順位の低い会長の話ってなんですか？」

俺のトゲのある一言に、「ぐぐぐ……！」と怒りに悶えた会長は、「ま、まあいいわ」と突如立ち上がり、後ろにあったホワイトボードを勢いよく叩く。

「無から有を！　ということで、今回はオリジナリティ溢れる作品

を作りましょう！」

「……」

当然、そこに生まれたのは沈黙。

しらけた空気の中、勇気を出して俺は口を開く。

「いや会長、これ、にじそうさ――」

「忍法、口封じ！」

「むが！」

突如、俺の口に大量のポッキーが詰め込まれた。

「むごう！　もごもも、ごもっもむごごごご！（くそう！　これでは、何も話せない！）」

「禁忌を口にした者は、こうなるのよ！」

会長は苦しみ悶える俺の襟首を掴み、見せしめのごとく他のメンバーに突き出した。いや、つうかさっきから地の文で言いまくってんですけど、禁忌。

「今回は初犯だから、ポッキーの刑で許してあげましょう！　次、口にしたらブラックサンダーの刑だからね！」

ああ、なんて平和ボケした刑罰。

会話を封じられた俺の代わりに、ツッコミ役二番手、深夏が「でもよ」と切り出す。

「鍵の言うことも一理あるぜ。この作品で、オリジナリティ溢れる作品を作るてのは……ちょっとなあ」

「す、すでにオリジナリティの欠片もないと思います……」

真冬ちゃんが深夏に続く。

「たとえできたとしても、無から有を生み出す前に、有から有を生み出す結果になってしまうと思います」

おっ。的確でキツい指摘。

「っ！　そ、その通りだわ……！」

議題の前提を覆す意見に、会長は絶句している。その様子を見て、「今回は、アカちゃんの負けね」と呟く。

その言葉を合図のように、会長がその場に崩れ落ちる。完敗。

正論だったとはいえ、その震える小さな背中に、椎名姉妹も「ちょっと言い過ぎたかも」みたいな表情をしている。

やはり、ここはハーレムの主としての、俺の出番じゃないか？

ということで、俺は立ち上がり、会長に歩み寄る。

「会長、元気出してください」

ポッキーを食べ終えた俺が、優しく話し掛ける。その震える背中に手を当てて、次の言葉を口にしようとしたその時。

「ふ、ふふふ……！」

……？　あれ、会長、泣いてた、んだよね？　なんか小悪党じみた笑い声が聞こえるんですけど。

「ふっふふふ！」

「えと。お聞きします。会長、なんで笑ってるんですか？」

次は俺の言葉を合図のように、会長は勢いよく立ち上がった！

「それなら！　今回は既存の作品のスピンアウトを作るわよ！」

「自分で禁忌言った――ッ！」

「もういいのよ！　そんなの！」

「いいんだ！　暗黙の了解事項、どうでもいいんだ！　ある意味新しい二次創作！」

「今の世の中、オリジナリティじゃない、いかに面白いかよ！」

「言い切った！」

「ということで、作るわよー！」

そう言うと、会長はホワイトボードの「オリジナリティ」を消し、「二次創作」を新たに書き記した。

「まさか、二次創作の舞台で二次創作を作ることになるとはな……」

俺の隣で、深夏がため息をこぼす。確かに、こんな内容の二次創作。世界初なんじゃないだろうか。

「で、アカちゃん。具体的には何の二次創作を作るつもりかしら？」

「あ！　それなら真冬、B――」

「まず、手始めとして『桃太郎』のパロディを作ろう！」

「なるほど。それならよくあるし、簡単そうだよな」

深夏が「うんうん」と頷く。そこで真冬ちゃんが立ち上がる。

「さ、最後まで聞いてください！　なんですか、「真冬、B」って！　何のランクですか！」

「真冬ちゃんの言うことなんて決まってるのよ！　もう「B」の時点で確信できてるのよ！」

「うぐっ！　そ、それでも！　最後まで言わせてください！」

「却下！」

「えええ！？」

「今回の議論に、真冬ちゃんの発言権、なし！」

「それもはや「議」論に必要ない存在じゃないですか！」

「いいのよ！　そもそも、真冬ちゃん以外にＢＬ物読んだことある人いないじゃない！」

確かに。それでは真冬ちゃんにしか二次創作を作れない。会長にしては良い指摘である。まあ、ただ単にＢＬ二次創作を作らせない理由を作っただけなのだろうが。

「うぐぅ……。会長さんに、討論で負けるとは思いませんでした……」

勝てる気があったらしい。真冬ちゃん、さすがに無理だよ、それは。

俺も有名なエロゲの二次創作を提案したかったが、真冬ちゃん同様に潰されるだろうから、心のうちにしまっておくことにする。

真冬ちゃんは「次こそは……！」とか言い残して引き下がった。次があるかどうかは置いとこう。

「じゃあ、『桃太郎』で進めていくわね！」

なぜか桃太郎にノリノリな会長。多分、最初からこの議題に持ち込む予定だったのだろう。

会長はホワイトボードに『もも太郎』と書き加える。桃の漢字は分からなかったらしい。

そこで深夏が手を上げる。

「あたしさ、二次創作って言葉とか意味は知っているけど、具体的にどういう内容なのかは知らないんだよな。実際にはどういうのが多いんだ？」

その言葉に、「そうねえ」と知弦さんが顎に手を当てて考える。

「例を挙げれば、完結した原作の「その後の話」だったり、原作の設定を変えてストーリーを進める話だったり、原作の裏話的なものだったりするわね」

「なるほど。じゃあ、今回の『桃太郎』はそれのどれに属するんだ？　会長さん」

「えっ？　そ、そうねえ！　どれにしようかしらねえ！」

会長は不意を突かれたように動揺しながら苦笑いを浮かべる。知弦さんの説明を真剣に聞いていた深夏は知らないが、実は会長も説明を「ふんふん」と頷きながら聞いていたのだ。つまり、二次創作の主な分類について何も知らなかったようである。

「え、えっとねえ！　知弦の例であった……えと、ふ、二つ目のやちゅ！」

死に物狂いで言った言葉は、最後で噛んでしまったようだ。ちょっと涙目の会長。……ああ、可愛い。知弦さんも満たされたような表情をしている。

「えーと、二つ目ってのは……、『原作の設定を変えて進める』やつだったっけ？」

「そ、そうよ！　それそれ！」

会長はおぼつかない手つきでホワイトボードに『メタモルフォーゼ』と書く。なぜに突然変異させる必要があるのだろうか。

「そ、それならばです！」

そこで突如、真冬ちゃんの参入。うわあ、また面倒臭いこと言うんだろうなあ、という視線が彼女に集中する。その威圧に「ううっ」と押されそうになりながらも、真冬ちゃんは負けじと切り出す。

「設定を変えるならば、真冬はそこで、『桃太郎』にB――」

「真冬ちゃんに発言権なし！　意見は無効！」

「ううううっ！」

「そ、それならばッ！」

ここで真冬ちゃんに代わって、俺こと杉崎鍵の参入！　ふっ。この機会をずっと待っていたんだ！

「設定を変えるならば、桃太郎が鬼ヶ島学園でいろいろな女の子とあんなことやこんなことをするハーレム物に――」

「杉崎にも発言権なし！　地に還れ！」

「ＢＬより扱いひでえ！　でも会長、大丈夫！　鬼ヶ島ということもあって、そこの女生徒は皆ツンデレですから！」

「なにが大丈夫なの！？　却下！　そして地に還れ！」

「ぐっ。ちくしょう……！」

俺は奥歯を噛み締めながら引き下がる。その様子を深夏が「変に発言しねえな、と思ってたら、お前、その意見を言うタイミングを見計らってたのか……」と言って眺める。ちくしょう……。この意見が通ったら、その後、生徒会メンバーで実写化しようと思っていたのに……。ああ、地に還りたい……。

「全く、真冬ちゃんと杉崎は……」

「それならば、会長さん！」

「こ、今度は深夏！？」

「ふっ。あたしはバカな妹や愚者とは違うぜ！」

「俺、愚者！？」

「あたしは、桃太郎が鬼ヶ島についてから鬼を倒し終えるまでの過程を大事にしていきたい！」

「あっ。けっこう真面目な意見。それでそれで？」

「まず、桃太郎の世界では、誰もが超能力を使える！」

「お、おお！」

「そしてその世界ではそれぞれの能力の強さに応じて階級が付けられているんだ！　ほとんど能力なしに近いレベル０、発火やスタンガン程度の電気放出など一般的な能力レベル１，２，３、瞬間移動や強大な物理現象を引き起こす「超」能力レベル４！　そして自然の摂理さえも超越するほどの「鬼」能力レベル５！　といった具合だ！」

ん？　なんかそんなん聞いたことあるぞ。会長も俺と同じことを思っているのか、「う、うん……」と勢いがなくなってきている。

深夏はポケ〇ンの主人公のように熱い笑顔を浮かべて続ける。

「そして鬼ヶ島とは人類にとって危険なレベル５の人間が集められている場所で、最近そこからやってきた「鬼」能力者たちが、一般人に被害を与えているんだ！」

「許せねえ！」と一人燃え上がる深夏。

「そこで立ち上がったのが、街のレベル０、桃太郎！」

「桃太郎、レベル０なんだ！」

「おう。でもな、桃太郎の能力は機械でランク付けすることができ

ないシロモノだったんだ！」

あ、桃太郎の能力、なんか分かった気がする。

「桃太郎の能力は、その右手に触れた超能力を打ち消す『幻想潰し』！　彼は世間に認められないまでも、一人で数々の能力を振りかざす悪人を拳一つで倒してきたんだ！」

「かっけえー！」と興奮しきった深夏はその場に立ち上がる。

「桃太郎はこれまで一緒に戦った仲間たちと『きび団子同盟』を結成する！」

「なんかいちご同盟みたいね」

「そして、いよいよ鬼たちを懲らしめるべく、鬼ヶ島へと向かったんだ！」

深夏は拳を握り締めて熱く語り続ける。

「そして『きび団子同盟』と「鬼」能力者たちの戦い！　苦戦の数々！　そして機転やチームワークを生かして勝利！」

「おお。けっこう順調」

「だが、ボス『アセロラウメーゾ』の絶対的な能力『ベクトル変更』に手も足も出ない『きび団子同盟』！　参謀担当、雉丸の死！　友を守れぬ弱さに、無力を噛み締めるかみじょ……桃太郎！」

「おい！　いま言いかけたよ！　つうかこれ『桃太郎』じゃない別

の作品の二次創作になってない！？」
「そしてなんだかんだで勝利！」
「仲間死んだわりにはあっさりね！」
「正義は勝つ！」
「……もう、いいわ」
なぜかはあはあ、と息切れしている深夏は、椅子に座って一息つく。
「……で、どうよ。会長さん」
その顔は自信に満ち溢れている。
「却下」
「なんでだよ！」
「もう『桃太郎』の二次創作じゃなかったもん。『とある魔術の禁書〇録』のパクリ物だったもん」
「うぐっ！　い、いいじゃんか！　二次創作なんだし！」
「それに、人が死ぬのは嫌いだし」
「それは会長さんの個人的な……」

「とにかく却下！」

「うう～」

あれだけ語ったのに、全然報われなかった深夏は、「次こそは……！」と次回に向けて決意を固めていた。いや、だから次回あるわけ？

「……それで、知弦もなにかあるの？」

会長の疲れたような言葉に、知弦さんは「そうねえ」と目を泳がせる。

「いや。特にはないわね」

会長はほっ、と胸を撫で下ろす。

それにしても珍しいな。こういう場面では、知弦さんが一番やっかいなシチュエーションを提示してくると思っていたのに。

「ただ、一つ、希望みたいなものはあるわね」

知弦さんは綺麗な人差し指をつき立てて言う。

「希望？」

会長が聞くと、知弦さんは不敵な笑みを浮かべて、

「最終的には、鬼が桃太郎を倒して終了」

「意味ねえ！　なんですかそのバッドエンド！」

「正義だろうと悪だろうと、力ある者が勝利するのよ」

「でも原作では機転を利かせて、桃太郎の方が強かったんじゃ……」

「ああ。大丈夫。桃太郎、鬼ヶ島に向かう途中、海の上で、鬼たちの奇襲を受けて死ぬから」

「もはや鬼ヶ島さえ行けてない！」

「助かったのはキジだけね」

「今回はキジが生還した！」

「鬼の夕食になったけどね」

「キジぃ――っ！」

「サルと桃太郎は、肉が繊維質でおいしくなかったみたい」

「酷すぎる！　むごすぎますよ！　その桃太郎！」

知弦さん以外のメンバーはあまりの桃太郎の報われなさに絶望している。熱血でハッピーエンドを重んじる深夏に関しては、もう、廃人だ。

「だ、だめだよ！　そんなの！」

会長が悲しみに満ちた表情で知弦さんに反論する。ああ、だめだ会長。あなたが、そんないじめたくなるような顔してたら、彼女は……。

俺は視線を移動させてみる。……やっぱりか。知弦さんは頬に手を当てて、悦んだ笑顔を浮かべていた。

「そうよね。アカちゃん。こんなバッドエンド、いけないわよね」

「知弦……。そ、そうだよっ。分かってくれたんだね」

知弦さんはニコッと笑い、会長を見る。そして、

「じゃあ、普通に戻って……。桃太郎は鬼を倒した後、その戦利品として、鬼ヶ島に住む全ての首を討ち取り、村に帰ってそれをさらし首として広場に並べましたとさ。ちゃんちゃん♪」

「いやあ――――――――――ッ！」

会長がホラーじみた悲鳴を上げて、その場にへたり込み、倒れる。椎名姉妹は、意識が飛んだように机に突っ伏した。

俺は会長の下に駆け寄り、彼女の上体を起こす。会長は、気を失

っていた。

「会長！　会長！　大丈夫ですか！」

「……え。すぎ、さ、き……？」

会長はゆっくりと瞼を上げていく。

「会長、良かった……」

「私、なんで……」

「覚えてないんですか？」

「深夏の意見を却下したところから、さっぱり……」

突然だが、記憶喪失には二種類あるらしい。一つは脳に物理的な衝撃が加わり、一部の脳細胞とのケーブルが切れてしまうというものだ。そしてもう一つは、あまりに精神的ダメージが大きい記憶を、脳が危険だと判断し、自らその記憶を持つ脳細胞とのつながりを断ってしまうというもの。

そして会長のこの記憶喪失は……。

俺は彼女の方に振り向く。

そこには、有を無に返す、破壊者（クラッシャー）の姿があった。

紅葉知弦、人の記憶さえ消してしまう程の腕の持ち主。これこそまさに、レベル5――。

「……って、わあ！　杉崎、触らないでよ！」

「ひでえ！　さっきまでのいい感じの雰囲気はどこへ！」

気を持ち直した会長が、俺の手を弾いて知弦さんのもとへ駆け寄る。

「知弦ぅ。杉崎がいじめるよー」

「いや、実際会長をいじめたのはちづ」

「キー君！　だめじゃない！　アカちゃんに触れるなんて！」

「あれえ！？　俺、悪！？」

俺の叫びに、椎名姉妹もはっ、と起き上がる。

「ま、真冬……一体何を……？」

「うう……。なんか頭が重いぜ……」

やはり彼女たちも記憶を失っているらしい。

生徒会メンバーが全員起きたところで、知弦さんは「じゃあ」と話を切り出す。

「キー君の失礼は大目に見てあげるとして。アカちゃん、議論を進めましょうか」

「う、うん。分かった」

「なんか俺だけ悪者になってる！」

「杉崎……失望したよ」

「ええええ！　会長の好感度、急降下！」

「私も、キー君には少々残念だわ」

「あなたは全て知っているでしょう！」

俺はツッコむが、知弦さんは「さあ。何のことかしら」と白を切っている。ちくしょう。俺も気絶していれば良かった……！

「じゃあ、議論を再開するね！　誰か、他に意見ある人―！」

手を上げる以前に、全員が意見を会長に却下されているので、ここで手を上げる人はいない。

「知弦もない？」

「ええ。ないわよ。……もう十分だから」

俺の体が一瞬ビクッと震える。

「……。あれ、なんでだろう手が震える。ま、いっか！　じゃあこれ以上意見はないってことだね！」

俺たちは「うい～」と一斉に気の抜けた返事をする。よく考えれば皆、自分のやりたいことを却下されているのだ。乗り気ではないのは当然か。

そこで、深夏が「そういやさ」と口を開く。

「会長さんは何か意見ないのか？　何も言ってこなかったけど」

その何気ない一言に、会長は小さな肩を「くっくっく」と揺らしている。

「意見？　ないこともないけど皆がどうしてもって言うなら言ってあげないこともないけどお！？」

「うわ！　会長のくせに、よくその文を噛まないで言えましたね！」

「えへん。私も、日々成長しているんだよ！」

「じゃあこれ言えますか？　なまむぎなまごめなまたまご」

「そんなの、楽勝だよー。なまみゅぎゅにゃまごめにゃまたみゃあご！」

「……お上手ですねー」

「うわあ！　杉崎の悲哀に満ちた笑顔が痛い！……ってえ！　今はそれどころじゃないよ！」

「ちっ」

「確信犯だった！」

さすがの会長も、これしきで乗せられる人間ではなかったようだ。残念。

「で！　で！　聞きたい！？　私の意見！」

机をぱんぱん叩きながら、まるで夢見る少年少女のようなキラキラした視線を俺たちに向ける会長。

「ええ、まあ。聞きたいですけど……」

「じゃあ、杉崎がそこまで言うなら教えてあげよっかなー」

「ええ、まあ。教えてください」

「えっへへー。だめ」

か、可愛い！　けどそれとはまた違う何かが俺の中に滾る！　誰かサンドバックをくれ！

俺だけでなく、会長の可愛さと腹立たしさに当てられた生徒会メンバーは空に何かを求めている。深夏、今度、生徒会室に持ってきてくれ。サンドバック。

「でもー、私は優しい人だから、今日は特別に教えてあげるよー」

「わあ。会長は優しいんですねー」

「うん。そーだよー。えへへー」

「して、その意見とは？」

「うーん。どうしよっかなー。言おうかなー」

「いやいや、会長、そう言わずに」

「そんなに聞きたいー？　どうしよー」

いや、お願いします会長。そろそろ目の前の知弦さんの笑顔が崩れてきてるんです。さっきから隣で深夏が鉛筆をボキボキ折ってるんです。ちょうど今、真冬ちゃんが黒魔術の本から死の呪文のページを見つけちゃったんです。ああ、唱え始めてます。会長、自覚なしに死が迫ってますよー。

「よし！　じゃあ教えてあげるよ！　私の完璧すぎるほどの桃太郎パロディ！」

会長が満点の笑みを浮かべる。隣から鉛筆が折れる音がしなくなったのを確認して、俺は安堵の息を漏らした。

「私の考える桃太郎はねえ……」

そうやって、会長が語り始める。俺は思う。この人は、最初から自分の考えた桃太郎を俺たちに聞かせるためにこういう議題にしたんじゃないかって。そう考え込んでしまうとついには会長を殴ってしまうそうだから、俺は彼女の話に意識を集中させる。

「まず、主人公である桃太郎は私！　桜野くりむ！」

「まあ、そう来ると思っていましたよ」

「昔々、鍵爺さんは街へ女狩りへ、真冬婆さんは本屋へＢＬの本を買いに行きました」

「じじいになっても鍵の精力は尽きねえのか！」

「そして真冬ちゃんはおばあちゃんになってもＢＬを読み漁るんだ！」

「真冬、そんなのイヤです！」

「そうだね。さすがに年寄りになってもＢＬには……」

「先輩とは結婚したくありません！」

「そこ！？　愛を誓い合った中なのに！」

「だからといって結婚はイヤです！」

「もう……愛ってなんなのか分からなくなってきたよ」

がっくりとうな垂れる俺を無視して会長の桃太郎は続く。

「そして本屋でＢＬ本を立ち読みしていた真冬婆さんに、通りすがりの美少女から声が掛かる！「おばあちゃん、そんな年になってもＢＬなんて読んでいたらダメだよ」と。するとその人の声に心打た

れた真冬婆さんは、その子を家に連れて帰ることにしたの」

「軽く人さらい！」

「そういう時代なの」

「確かに……。鬼がはびこる時代だからな」

深夏が嘆息していると、その前では真冬ちゃんが「真冬、なんか趣味を全否定されてます……。しかも心打たれちゃいました……」と絶望していた。これを機にやめてくれればいいのに。ＢＬ趣味。

「そして家に帰った真冬婆さんは、名前のない美少女に鍵爺さんの本日行ってきたホステス、『桃甘堂』からとって、『桜野くりむ』にしました」

「『桃甘堂』関係ねええ！　しかも俺、ホステスに行ったのバレてるし！」

「アカちゃんの名前って、ホステスにちなんでるのね……」

「くりむ」は意外と大人なネーミングらしい。

「それから、くりむはすくすくと成長しました。身長は百七十を超え、バストはＧ……いやＩカップに！　容姿も大人らしい凛とした美人になり、世界三大美女の四人目に登録されました！」

「コンプレックス丸出しの未来ですね。世界三大美女の四人目なら、知弦さんみたいなのが向いてると思いますけど」

「あら、ありがとう。キー君」
「いやあ。本当のこと言っただけですよー」
「あら、そう？　うふふ」
「そうですよー。あはは」
俺と知弦さんが笑顔で談笑していると、「妻がいるのに、他の女の人に色目使うんですね、先輩……」と真冬ちゃんが俺を睨んできた。
「最低だな、鍵」
「深夏まで！？」
「杉崎……失望したよ」
「うわあ！　会長、本日二回目の好感度急降下！」
ちょっと知弦さん以外の皆の視線が怖いので、俺は会長を「そ、それで、続きは？」と促す。
ところが会長はきょとんとした顔で、
「え？　続きは、って、もうないよ？　終わったよ？　桃太郎」

「桃太郎じゃねええ――――――ッ！！」

俺と深夏は叫ぶ。それに圧倒されながら、会長は「な、何なの！？」とおどおどしながら知弦さんの後ろに隠れる。

「なんですかこれ！　ヤマもオチもないじゃないですか！」

「ええっ。いいじゃない！　これが！」

「うっせえ！　こんなの、会長さんが理想の自分語っただけじゃねえか！　あたしたち、妄想に付き合わされただけじゃねえか！」

「も、妄想じゃないもん！　いずれ来たる未来だもん！」

「来世頑張りやがれ！」

「遠まわしに否定しないでよ！」

追い詰められて、会長は涙目だ。俺らも少々バツが悪くなり、言い方を変えることにした。

「まあ、そんな未来が来るかは置いといて……。それでも、さすがに鬼ぐらいは出しましょうよ。桃太郎なんだし」

「いないよ、鬼なんか！　怖いもん！」

「どんだけ平和ボケしてんですか！　鬼の出てこない桃太郎なんて、桃の中に入れて流された捨て子じゃないですか！　存在意義がないじゃないですか！」

これぞ、奥義「ですか三連発」！

「いなくていい人なんていないよ！」

「じゃあ鬼のいない世界に生まれた桃太郎には何の役目があるってんだよおおぉお！」

「きび団子を食べる！」

「きび団子を食べることだけが存在する理由の桃太郎なんて……坂井君トーチの方が存在理由でけえよ……」

桃太郎の悲哀に満ちた存在意義に、深夏は涙ぐみながらツッコむ。

「じゃあ、会長、せめて鬼は出しましょう？　これじゃ桃太郎が可哀想です」

「うーん。杉崎がそこまでいうなら……」

良かった。桃太郎に鬼を登場させるぐらいには、俺にも権力というものがあったようだ。

「じゃあ、知弦が鬼ね！」

「――ッ！」

俺と椎名姉妹は勢いよく知弦さんのほうを振り向く。会長……、それは正真正銘、『禁忌』ってもんだぜ……。

そこには、嵐の前のような静けさを感じさせる、知弦さんの硬直した笑顔があった。

「すみませんでしたッ！」

気づくと、なぜか俺と深夏は土下座していた。

「あら、なんでキー君たちが謝るのかしら」

「それは……、保護者としてです！　会長の無垢な笑顔を守りたいからです！」

「あらあら、私は別に、なにアカちゃん私を登場させないまま桃太郎終わらせてるのよいくら心の広い私でもキー君を呪い殺すわよってあら私、鬼？　私、鬼？　そりゃ皆のイメージではそういうポジションが適しているのかもしれないけど私、鬼？　あららキー君呪い殺したくなってきたわ、……なんて思ってないわよ」

「会長のせいで俺の命が危ねえええ！　八つ当たりにも程がありますよ！」

「だって、この世で一番殺して差し支えないの、キー君だけだったもの」

「俺の存在価値って一体……」

「ミジンコね」

「それを引っ張ってこないでください！　人類共通の敵じゃないですか！」

「今さら自覚とはね……」

「人類じゃなかったんだ、俺！　この二次創作、本作以上にすごい事実が明かされていくよ！」

自分が人間の形をしたミジンコだと言うことを知り、崩れ落ちる俺を見て、知弦さんは何かが満たされたようで、「まあ、いいわ」と許してくれた。良かった。俺、呪い殺されるところだった。

俺たちのやり取りをぽかんと見ていた会長は、「じゃあ、話し始めていい？」と笑顔を浮かべていた。……ちくしょう、あなたのお陰でこっちは殺されかけてんですよ。

ええ、と知弦さんが相槌を打つと、会長はホワイトボードをぺしっ、と叩く。

「そして突如！　平和な暮らしを楽しんでいたくりむの目の前に、赤鬼「血吊る」が現れたのよ！」

「名前ホラー！」

「そして「血吊る」はくりむからきび団子を奪い、鬼ヶ島に逃げていったのよ！」

「おお！　途中経過がどうこうは置いといて、ここから山場に入る

んですね！」

「いや、くりむは心が広いから、見逃してあげるんだよ」

「血吊るぅ――っ！」

酷い！　血吊る、せっかく出てきたのに、放置されてしまった！

「そしてくりむは駄菓子屋『ふかなつ』で新たにきび団子を購入して、幸せな日常を過ごしていくのよ！　ちゃんちゃん♪」

「やっぱりつまらねえ！　しかもあたし、すげえ脇役だしよ！」

「『ふかなつ』のおばあちゃんは、いい人だよー」

「婆さんだった！」

「アカちゃん、酷いわ……。無二の親友である私を、鬼ヶ島に放置するなんて……」

「知弦、大丈夫。その後、皆は仲良く暮らすから」

「すげえ都合いいストーリーですねえ！　ハッピーエンドならぬハッピーストーリー！」

「あ、鍵爺さんは地に還ったわ。溢れ出す性欲に体を支配されて」

「どんだけ精力みなぎってんですか、俺！　しかも戦ってるし！」
気づくと、他の皆が俺から後ずさりしながら遠のいていた。
「え、ど、どうしたの？　ね、ねえ、真冬ちゃん」
「近づかないでッ！」
「近づくことさえ拒否された！」
「み、皆おかしいよ……？　な、なあ、みな」
「あたしの名を口にするな！」
「ヴォルデモート！？」
「黙れ！　この、犯罪予備軍が！」
「ひでえ！　そ、そりゃ確かにハーレム作るとか非人道的なこと考えていたりするけど、今さらそんな……」
「ええ。それは分かっていたつもりだったけど、まさか……、キー君がそこまでだったとは思わなかったの」
「どこまで！？　皆に引かれるほど、俺、どこまで行ったんですか！？」
「自覚症状がないって、怖いわね」

「一体なんなんだあああ！」

「……。まあ、それは置いといて」

「そっちのけにしちゃいけないぐらい今、間をおきましたよねえ！？」

「いいじゃない！　私、そっちの方が杉崎らしいと思う！」

「俺、知らない間にイメチェンしてた！」

「イメチェンって言うよりは、先輩がもっと深く濃くなったって感じです……」

「俺はどこに突っ込んだの！？」

「……。まあ、それは置いといて」

「さっきより三点リーダ増えてますけどねえ！」

「んで！　どうだった！？　私の桃太郎！」

「ああ！　本気でスルーされた！　あはは！　もういいや！」

会長は「杉崎はもうどうでもいいから！」と俺を押しのけ、ホワイトボードに「もも太郎、くりむＶｅｒ！」と書きなぐる。原作の面影、全く見当たらないんですけどね。

「もう最高傑作だよね！　生徒会の一存シリーズに、番外編として

出すべきだよね！」

なるほど。元はそれが目的か。なにかと金儲けには目がない会長のことだ。とにかく出版する本を増やして、原稿料と印税で稼ぎまくる所存なのだろう。

確かにそれは悪くない意見である。だが、しかし……。

俺を含め、知弦さん、椎名姉妹はすうっと同時に息を吸い込み、言い放った。

『却下！』

「えええ！」

ショックを受け、会長が後ずさる。そしてさらに追い込むように、俺たちは続ける。

「こんな会長さんの妄想に読者様方を付き合せられるか！」

「そもそも、物語として成立していませんよ！」

「こんなに面白みのない物語、真儀瑠先生にしか作れないと侮っていたわ」

「それに動機が不純すぎます！　とても出せません！」

俺たちの勢いに罵倒されて、会長は何も言えずにオドオドと後ずさる。

「う、うう。そこまで言わなくてもぉ……」

「とにかく、会長のは却下です！　文庫化もしません！」

「べ、別に文庫化はいいんだよう……！」

「へ？　どういうことですか？」

会長の言葉に、知弦さんや椎名姉妹もきょとんとしている。

「なんだ、てっきり金目当てかと……」

「……杉崎の中で、私はどういう人間になってるんだよう」

会長が泣き出しそうになるのを「そ、それで！」と俺は話題転換で抑える。

「じゃあなんで会長は、この『もも太郎、くりむＶｅｒ！』を俺たちに推したんですか？」

俺の質問に、会長が「それは……」と口を開く。

「こういう物語、あったらいいな、って思って……」

「……え？」

「だ、だから！　ほら、大体の物語ってハッピーエンドじゃない」

「ええ。まあ、バッドエンド物も多いですけど、やっぱりハッピーエンドの方が圧倒的ですよね」

最近は恋人が死んだり、根本的に最初からバッドだったりな創作が流行っているが。

「それがどうかしたんですか？」

「私……ハッピーエンド、それはそれで好きなんだけど……。ああいうのって、ほら、物語の序盤や中盤では悲劇が多かったりするじゃない」

「そうですね。そして最終的には主人公たちがその悲しみを乗り越えたりして、幸せな結末を迎えるって感じですよね。そういう所が視聴者に共感を覚えさせて、感動する仕組みなんでしょうね」

「それが気に入らないの！」

「それが、ですか？」

俺のふいに出た相槌に、会長は「そう！」と力強く返す。

「その、なんていうか、そういう悲劇みたいなの。いらないと思うんだ、私」

「そうですか？　でも、悲劇があるからこそのハッピーエンドじゃないですか」

「むむう。それはそうなんだけど……。なんだか、最初から最後まで悲劇なんてない、ハッピーな物語があってもいいんじゃないかな」

「……なるほど」

俺がそう一息つくと、真冬ちゃんが「ま、真冬も……」と切り出す。

「ＢＬだけじゃない他の恋愛物を読んでいても思うんです。三角関係やトラブルで、いつも主人公には悲しいことが訪れて。いつか主人公は相手の人と結ばれるんだ、って分かっていても、やっぱりその部分を読むのは辛いです……」

真冬ちゃんの意見に、深夏が頷く。

「あたしも、少年漫画とか読んでて思うんだけどさ。最近のバトル物ってけっこう重要な登場人物がよく死ぬんだよな。そのお陰で主人公が精神的とか身体的に強くなったりするんだけどさ、なんかこう、その後とかその死んだやつのことばっかり引きずってストーリー進んだりして、ずっと暗い雰囲気なんだよな。最終的にはハッピーエンドになったりしてるけど、それもなんか「仇を討ったー」って感じでさ」

「確かに、なんか分かる気がするなー。エロゲとかでもさ、ヒロインはそれぞれ辛い過去を抱えていて……」

「ま、鍵の意見は置いといてだ」

「なんでだよ！　恋愛物としては、真冬ちゃんと変わらないじゃないか！」

「対象年齢が違うんだよ！」

「ぐさっ！　的確な指摘！」

一人痛む胸を押さえる俺に、知弦さんが「盲点だったわね」と慰めてくれた。くう、この人は……天使だ！

と、知弦さんの慈悲に感動しつつ、俺は考えていた。

「……犠牲の上での、栄光か」

つまり、会長も真冬ちゃんも深夏も、そして俺も、これについてどうかと思っているのだ。

幸せな暮らしがあって、それが崩れてしまって、立ち直ろうとするけど様々な困難があって、それでもめげずに頑張る主人公たちがいて、最後には幸せな結末を掴む……。そういうのがダメってわけじゃないけど、どうもそれだと「幸せになるためには辛いことを経験しないといけない」って結論になってしまうわけで、会長はそれが納得いかなかったのだろう。

「だって、辛いことなんて、無いに越したことはないんだよ。悲しいことなんて何もなくて、皆が当たり前のように幸せに過ごせる……。そういうのが、一番なんじゃないかな」

呆れるくらいに、でも思わず頷いてしまうほど微笑ましい、会長らしい言葉だった。

俺も、それが一番いいことだと思う。いや、俺だけではない。真冬ちゃんも、深夏も、知弦さんも、この生徒会の誰もが、「当たり前の幸せ」を望んでいる。それは、彼女たちの重い過去によるものなのかもしれない。やっぱり辛い経験をしているからこそ、望む価値を見出せたものかもしれない。それでも……、こういうことを一番に考えきれる彼女たちを、やっぱり俺は大好きだ。

そんな感じのことをしみじみと皆思っているのだろうか、誰も口を開かなかった。

「え、えと。なんかしんみりなっちゃったね……。よし！　今日の議論、終わり！　それぞれの仕事に戻ろう！」

会長にしては空気の読めた一言に、俺たちは「おー」とだけ返事をし、各々のやるべきことに取り組み始める。

書類にペンを走らせながら、俺はふと、ホワイトボードに視線をやった。

『二次創作』――……。舞台が二次創作なだけに、『無から有を生み出す』ことはできなくなってしまった悲しい結果の議題だが、ここで俺たちは『有から有』を知ることができた。まあ、簡単に言えば、お互いのことを再認識できたと言っていいだろう。

ずっと続く、「当たり前の平和」。それを、俺たちは望んでいる。

誰も傷つかなくていい。悲劇なんて起こらなくていい。どうせな

ら、最初から最後まで喜劇の方がなによりも最高の結末じゃないか。

でも、それを叶えるのは難しいことかもしれない。

けれど。けれど、それでも、俺は。

「会長」

俺は会長の方を向く。彼女は絵本（桃太郎）を読む手を止め、「何？　杉崎」と顔を上げて俺を見た。

そのつぶらな瞳を見据えながら、俺は言った。

「大丈夫ですよ。俺が、皆を一生幸せにしますから」

普段だったら「だから！　その『皆』って言うところが不純なんだよー！」とか怒られる発言だったが、不思議と今回の彼女はそういう反応は見せなかった。

むしろ、笑ってくれた。

「うん。楽しみにしてるね」

気がつくと、他の皆も俺の方に視線を集中させていて、その美しい顔のどれもが、柔らかで優しい笑みを浮かべていた。

こんな風に皆から好意を向けられるのは初めてではないだろうか。初めて「肯定」の意思を受け取り、俺は照れ臭くなって、作業を再開した。

そうだ。皆が望んでいるなら、俺が叶えてやる。辛い過去を忘れられるくらい、幸せにしてあげよう。

俺に未来をくれた会長も、俺に元気をくれた深夏も、俺を優しさで包んでくれた知弦さんも、俺に本当の強さを教えてくれた真冬ちゃんも……。

みんな、俺が幸せにするんだ。

（後書き）

短編続いていますけど、ちゃんと連載の方も進んでいますよ？
どうも、墨風澄春です。

え～。勢いでやってしまいました。生徒会の一存、二次創作です。

墨風は基本的にオリジナル命！　な人間なのですが、初めてこの「生徒会の一存」を読んだ時、体中に電撃が走ったあの日の思いが、今さらですけど自分の腕を動かしたのです。そう、つまり、これを書いたのは自分ではなく、あの電撃のせいなのです。そういうことにしておきましょう。

この作品、原作の時系列で言えば、「生徒会の五彩」――つまり「企業編」が片付いた五巻辺りの頃の話になります。墨風自身、まだ六巻を読んでいないのもありますが、ストーリー的にひと段落着いたところの方が、読者様方にも分かりやすいかなと思いまして。

基本的には原作の雰囲気をそのままに、簡単に言えば原作のノリをパクッた感じの構成&ギャグとなっております。個人的に言いますと、自分の「我の小説こうあるべき」みたいなのに「生徒会」がマッチしていたので無理に考えず作れました。失礼ながら、作風が似ていた、ということでございます。慢心極まりない男です。
反響が良ければ、また書いてみたいな、と思っています。この電撃が。

おっと。原作者でもないのに長々と書いてしまいました。そろそろ筆を擱かせていただきたいと思います。

最後に、「二次創作の分際でえ！」なこの作品に、最後まで付き合っていただいた読者あなた様、本当にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5466i/

生徒会の二次

2010年10月8日23時40分発行